

# 映像作家 イギル・ボラが

## まなざす 〈<sup>リアル</sup>現実〉

### — 一生の輝きを見つめ、戦争の暴力を問う —

人間の世界はなんと素晴らしく、なんと残酷なのだろうか。映画製作を通して自らが抱える〈現実〉とラディカルに向き合い続けるイギル・ボラさんの作品を手がかりに、人間的な生の営みの原点と、国家が生み出す戦時性暴力の問題について考えてみたい。(河合塾「日韓文化交流研究会」 朴勝憲/パクソン)

#### 第1部(13:30~)

- ① 『きらめく拍手の音』(2014年/80分)上映 <http://www.kirameku-hakusyu.com/>

聴こえる「わたし」が見つめる、聴こえない両親の世界。表情ゆたかな手話が交差する、静かだけれどにぎやかな家族のものがたり

- ② イギル・ボラ監督からのビデオメッセージ

#### 第2部(15:40~)

- ① 『記憶の戦争』(2018年/79分)上映 <https://www.sumomo-inc.com/kiokunosensou>

イギル・ボラ監督が、全員女性の制作陣とともに、韓国軍による「ベトナム民間人虐殺」の記憶について、当事者たちの生々しい証言の数々を記録したドキュメンタリー

- ② 「ベトナム戦争と韓国」『藤井たけしの韓国現代史講座〈番外編〉』藤井たけし(東京外国語大学教員)

イギル・ボラ 1990年、韓国生まれ。映画監督・作家。

ろう者である両親のもとでコーダとして生まれ育ち、8歳から手話通訳を始める。18歳の時、高校を中退し、クラウドファンディングで集めた資金を手に東南アジアを旅した。帰国後、韓国芸術総合学校で映画製作を学び、中編ドキュメンタリー映画『ロードスクーラー』(2008)を発表。『きらめく拍手の音』(2014)、『記憶の戦争』(2018)で数々の賞を受賞した。現在はソウルと福岡を拠点として女性問題をテーマとしたドキュメンタリーの製作に取りかかっている。本名はイ/李・ボラで、母の姓であるキル/吉を付けたところ、「この道を見よ」の意味ともなるため、イギル・ボラとして活動している。主な著作に『道は学校だ』(2009、未邦訳)、『きらめく拍手の音』(2015、矢澤浩子訳)などが、共著に『私たちはコーダです』(2019、未邦訳)がある。

日 時:3月20日(日) 第1部 13:30~、第2部 15:40~17:30 ※コロナ対策をしっかりとります。

【要予約】[masipon@nifty.com](mailto:masipon@nifty.com) まで

場 所:元・辻本写真館(大阪市生野区新今里2-9-16)「新今里公園」東北角

近鉄奈良線・大阪線「今里駅」徒歩5分/大阪メトロ千日前線「今里駅」徒歩10分

共 催:河合塾「日韓文化交流研究会」

NPO 法人猪飼野セツパラム文庫 <https://sepparam-bunko.jimdofree.com>

## 〔上映作品紹介〕

### 【第1部】『きらめく拍手の音』（2014年/80分/配給:ノンデライコ）

#### ●ソウル国際女性映画祭観客賞受賞・山形国際ドキュメンタリー映画祭アジア千波万波部門特別賞受賞

サッカー選手を目指した青年が、ある日教会で出会った美人の娘にひとめぼれ。青年と娘はやがて夫婦になり、ふたりの子どもを授かる。つつましく暮らすどこにでもある家族だが、他とちょっと違うのは、夫婦は耳が聴こえず、その子どもたちは聴こえるということ。泣き声が聴こえず、片時も目をはなせない育児は大変な苦勞。子どもたちには、幼いころから手話通訳をさせたり、理不尽な差別に悩ませていたが、夫婦は子どもたちを明るく愛情いっぱい育てた。

早く大人になろうとした自立心溢れる姉と弟のきょうだいは20代になり、親から離れる時期を迎え、外の世界を知ることで、音のない世界と音であふれる世界のはざまにいる自分たちを徐々に受け入れきた。耳の聴こえない両親への心配は絶えないが、自分たちも将来の問題で精一杯。聴こえない人たちは、ときに手をたたき代わりに手のひらを高くあげてひらひらときらめかせる。それは、もうひとつの世界へといざなう音のない拍手なのだ。

本作がイギル・ボラ監督の劇場公開デビュー作。繊細な語り口で自身の家族を見つめる視線はやわらかく、「CODA」としての葛藤も交えながら、ろう者の日常をこれまでにない親密な距離でつむいでゆく。この映画は、大人になった娘が、両親から受け取ったたくさんのものへ、まるでプレゼントを返すように撮られた作品。

### 【第2部】『記憶の戦争』（2018年/79分/配給:スモモ・マンシーズエンターテインメント）

#### ●釜山国際映画祭メセナ賞審査員特別賞受賞

ろう者の両親をあたたかな視点で描いた『きらめく拍手の音』（2014年）で高い評価を得た韓国のイギル・ボラ監督が、参戦軍人だった祖父の面影をきっかけにして、ベトナム戦争時の韓国軍によるベトナム民間人虐殺の記憶に迫ったドキュメンタリー。

2018年4月にソウルで開かれた市民平和法廷に立つベトナム人女性、グエン・ティ・タン。彼女は、1968年のベトナム戦争中に韓国軍が起した虐殺事件「フォンニィ・フォンニャットの虐殺」の生存者。8歳の時に韓国軍に家族を殺され孤児となった彼女は、その記憶を思い出して涙を浮かべる。ベトナムのリゾート都市ダナンから車で20分ほどの場所にあるフォンニィ村。村では陰暦の2月に同日同時刻に亡くなった村人たちを弔い、慰霊碑の前で50年間欠かさず祭祀を執りおこなってきた。

あの日の出来事を目撃したディン・コムは身振り手振りを交えて当時を再現し、あの日の後遺症で視力を失ったグエン・ラップはこれまで語ることのなかった記憶を絞り出すように語り始める。その一方で、韓国軍人たちは「我々は良民は殺していない」との主張をする。

「自分たちに責任はない」「むしろ現地の発展のために貢献した」……聞き覚えのある言葉ばかりが飛び交った。暴力は地続きで、凄惨な虐殺も加害の否認も、日本軍の時代から連鎖しているのだろう。  
——安田菜津紀（フォトジャーナリスト）

8歳の記憶、あなたは何を覚えているだろう。お気に入りのワンピースを着て行ったディズニーランドで見たパレードの光、友達と蟬取りに夢中になっていたあの日。私の中にはその記憶が8歳当時のものだったのか不確かなままのものが浮かぶ。しかし、タンおぼさんの記憶は今でも鮮明だ。彼女はその記憶を1日も忘れたことはない。それは、彼女自身が生きる意味を問い続けてきた記憶だから。生きてその記憶を伝えてくれたタンおぼさんに感謝する。——伊藤詩織（映像ジャーナリスト）

藤井たけし 東京外国語大学教員（専攻：朝鮮現代史、特に40～50年代の南の政治史/思想史）。京都大学文学部・大阪大学大学院修士課程を経て、韓国・成均館大学校大学院で博士学位を取得し、2017年まで韓国の諸大学で韓国の歴史などを講義した。韓国の代表的歴史家団体である「歴史問題研究所」で、外国人としては初めて研究責任者である研究室長を務めた。著書に『과시즘과 제3세계 주의 사이에서/ファシズムと第三世界主義のあいだで』（2012、역사비평사）、『무명의 말들/無名のことばたち』（2018、포도밭）（ともに朝鮮語）などがある。